國學院大學学術情報リポジトリ

Hitachinomiya's Latter-Day Child : The Characterization of Suetsumhana and Descriptive Narrative in The Tale of Genji

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Tsukahara, Akihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000699

常陸の宮の晩年の姫君
―末摘花の人物設定と物語表現―

塚原明弘

一、はじめに

光源氏は故常陸の宮の姫君末摘花と、「末摘花」巻で出逢い、「蓬生」巻で再会する。姫君は、二条東院に引き取られ、後日談も語られるが、主要人物として描かれるのは、この二帖である。前者では、姫君の醜貌が焦点になり、後者では、古風な生き方と困窮からの救済が描かれる。

容姿と生き方が、末摘花の人物造型の特徴といえよう。研究史も、その二点を中心に拓かれた。外見に注目する論考は、笑劇性や神話性に照明をあて[1]、生き方を取り上げる論考は、姫君の精神性や宿世を分析対象にした[2]。さらに、両者を前提として、変貌や一貫性が析出された[3]。

その中に、常陸の宮の晩年の姫君という人物設定に着目するものもあったが[4]、内在する矛盾までは論及されなかった。私見によれば、この人物設定に、末摘花という人物造型の妙があると思われるのである。

光源氏の感慨（末摘花(1)二九五～六頁[5]）や、姫君の夢（蓬生(2)三四五頁）によれば、常陸の宮は、現世に思いを残して亡くなったと推測できよう。それはどんな思いか。姫君はなぜ沈淪

したのか。常陸の宮の晩年の姫君という人物設定に暗示された背景を明らかにし、物語表現との連環を探りたい。

二、「御兄弟の禅師の君」の表現性

「蓬生」巻。光源氏不在の京。末摘花の日常が語られる。

（末摘花は）はかなきことにてもとぶらひきこゆる人はなき御身なり。ただ御兄弟の禅師の君ばかりぞ、まれにも京に出でたまふ時はさしのぞきたまへど、それも世になき古めき人にて、同じき法師といふ中にも、たづきなくこの世を離れたる聖にものしたまひて、しげき草蓬をだにかき払はむものとも思ひよりたまはず。

（蓬生(2)三二九頁）

出家した兄の存在が初めて明らかになる。禅師の君は、上京時に立ち寄る。末摘花にとって、唯一の来訪者である。古風で浮世離れしている。要領がいいとはいえない。姫君の性格設定に通じる。後段では、源氏主催の「故院の御料の御八講」に奉仕し、源氏の現況を伝える人物である（同三三七頁）。

出家の事情が不審である。親王家の後継者は、ほかにいない。臣籍に降っても、従四位下で元服できる。[6] 姫君にとっては、唯一の後見候補である。[7] 仏道に帰依したにせよ、出家には障害があったはずなのである。なぜ、妹を捨て、家を棄て、洛外に隠棲したのか。できたのか。何が背中を押したのか。物語は語らない。故常陸の宮の嫡子が出家し、「禅師の君」と呼ばれる。[8] それだけである。

平安時代の男性貴族の出家には、三つの要因が考えられよう。第一は、子弟が多く、後継者として期待されないばあいである。若くして出家した。第二は、老齢か病弱で、余命を意識するばあいである。死後の救済を求めて出家した。「臨終出家」と呼ばれる。[9] 第三は、現世に絶望したばあいである。来世に希望を求めて出家した。[10]

「禅師の君」については、玉上琢彌『源氏物語評釈』（第三巻、角川書店、一九六五）以来、「内供奉十禅師」の可能性が指摘されている。玉上氏は「法師の尊称。もっとも内供奉（宮中の道場に供奉する僧）という職があり、それに十禅師が当てられたから、ここも、その一人であるかも知れない」（三七六頁注三）とした。内供奉十禅師は、僧綱（僧正・僧都・律師）につぐ官僧である。古記録でも仮名文学でも、「内供」「内供奉」と記すのが通例である。[11] 洛外に隠棲する「禅師の君」は、法師の尊称という語釈にとどめるべきであろう。「初音」巻で「醍醐の阿

閨梨の君」（初音(3)一五四頁）と呼ばれるにいたるが、[12] 光源氏の支援を得た結果と考えられる。

禅師の君が内供奉十禅師であれば、第一の原因もありえよう。若く壮健で、常陸の宮家を継承する嫡子だったとすれば、第二の可能性もない。可能性が高いのは第三、現世に対する絶望である。禅師の君は、世俗的な希望を失った結果、家も妹も顧みずに出家したのではないだろうか。そうであるとすれば、何が彼を絶望させたのか。

常陸の宮の晩年の姫君という設定が、次の手がかりになる。

三、「故常陸の親王の末にまうけて」

末摘花の情報は、乳母子大輔命婦が光源氏にもたらす。

故常陸の親王の末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ、心細くて残りゐたるを、もののついでに語りきこえければ、「あはれのことや」とて、御心とどめて問ひ聞きたまふ。（末摘花(1)二六六～七頁）

父宮についての情報は、このくだりに限られる。その後も、末摘花は「常陸の宮の君」（蓬生(2)三二六頁）と呼ばれ、邸宅は「常陸の宮」（末摘花(1)二七七頁、蓬生(2)三四四頁）とされる。常陸の宮以外の履歴は見えない。ここから読み取れるのは、常陸の宮を極位極官かつ最終官位とし、ある程度長命で、晩年にいたって姫宮を儲けたということである。しかしこれは、特異な設定といえそうなのである。

常陸の宮は、三国太守の一人である。上総・上野・常陸の三国の国守は親王が任命され、「太守」と称された。赴任せず、実務は介が司った。天長三年（八二六）に設置されて以降、常置となった。令外官である。安田政彦氏は「親王の任官対策」と評価し、「貞観期（八六〇・七〇年代）頃を境として変質し、親王の八省卿進出の恒常化とともに参議兼国同様に、京官兼任が圧倒的に多くなる」と指摘する。[13] だが、末摘花の父宮に、京官兼任の形跡はない。

親王の補任先には、ほかに、式部卿、兵部卿、中務卿（八省卿）、弾正尹、大宰帥があった。問題は、格差である。律令の規定によれば、中務卿の相当官位は正四位上、その他の卿は正四位下、弾正尹と大宰帥は従三位、三国（常陸・上総・上野）の国守は、従五位上である。安田氏によれば、「式部卿」は、「生母の血統や品位のうえで優越する長老的親王が任じられ、歴代にわたる親王群における筆頭親王とでもいうべき『第一の親王』が任官すべきものとされた。終身官的であり、親王中に重きを

なした」。三国太守は「四品親王の任ずべき官として定着し、京官よりも低くみられ」[14]、任官例は減少する。親王の補任先として、低く認識されていたのである。

この格差は、物語の描写にも反映している。

その日、親王たち、大人におはするは、みなさぶらひたまふ。后腹のは、いづれともなく気高くきよげにおはします中にも、この兵部卿宮は、げにいとすぐれてこよなう見えたまふ。四の皇子、常陸の宮と聞こゆる更衣腹のは、思ひなしにや、けはひこよなう劣りたまへり。

（匂兵部卿⑤三三頁）

匂の宮（兵部卿宮）の卓抜を際立たせる存在として、常陸の宮が選ばれている。両者の優劣に、身分格差が読み取れよう。

『うつほ物語』では、嵯峨の院で詠まれた歌の紹介順（国譲下③三九三～五頁）に親王間格差が看取されている。[15]「嵯峨の院」「内裏」「朱雀院」の次に、「式部卿の宮」「中務の宮」「兵部卿の親王」「弾正の宮」「帥の親王」「五の宮」「常陸の太守の親王」の順で、列挙されているのである。

「故常陸の親王」という呼称には、皇族として、幸運とはいえない経緯が推定される。親王宣旨を受け、常陸太守に任官し、昇官しないまま薨去したことになる。夭逝していれば、まだ平仄が合う。成人し、常陸太守に補任され、ほどなく亡くなったのであれば、「故常陸の親王」と呼ばれよう。ところが、末摘花は「末」に儲けた娘である。短命ではなかったと思われる。にもかかわらず、常陸太守が極官だった。

高橋和夫氏の指摘が想起される。高橋氏は、桓武朝から花山朝まで（七八一～九八六）、親王八十三人の最終官位を調べ、「最終官位が常陸太守であった親王は、一人もいない。つまり、死後に、常陸宮と呼ばれ、伝えられた人は、少なくとも記録に見られる限り、一人もいない」[16]と指摘した。常陸太守に補任された者は、亡くなるまでに、京官を兼任するか、転任するかしたのである。

晩年に姫宮を儲け「故常陸の親王」と呼ばれる。矛盾した人物設定であり、現実には存在しない、架空の設定だったのである。

それがありえたとすれば、どういうばあいが考えられようか。

四、昭平親王の姫君

常陸太守に補任された親王の履歴を、物語の設定を念頭に検討しなおそう。十七人の親王が対象になる。賀陽、葛原、葛井、

忠良、時康、仲野、人康、惟喬、惟彦、惟恒、貞固、貞数、是貞、貞真、代明、有明、昭平である。[17] すべて『源氏物語』成立以前の補任である。『平安時代史事典』（角川書店、一九九四）を頼りに、手がかりになる親王を探す。

ひとり浮上するのが、昭平親王（九五四～一〇一三）である。村上天皇第九皇子。天徳四年（九六〇）に臣籍に下り、源氏を賜姓され、右兵衛督（従四位下）を務める。安和の変（九六九）を経て、貞元二年（九七七）二十四歳のとき、醍醐天皇皇子源兼明（九一四～八七）とともに親王にもどされ、四品に叙され、常陸太守を務めた。『国司補任』第二～四（続群書類従完成会、一九八九、九〇）によれば、昭平以降に常陸太守補任の記録はない。物語成立時、直近の常陸太守だった可能性がある。

詔以二左大臣従二位源兼明朝臣。正四位下行右兵衛督同昭平朝臣等一為二親王一。即叙品。兼明二品。昭平四品。

（『日本紀略』貞元二年四月二十一日条）[18]

同時に親王宣下を受けた兼明は、中務卿に叙される。「松風」巻に「昔、母君の御祖父、中務宮と聞こえける」（松風(2)三九八頁）とあって、明石の尼君の祖父の准拠と目される。[19]

源兼明の皇籍復帰の事情が、『栄花物語』に見える。

かかるほどに、大殿（兼通）思すやう、世の中もはかなきに、いかでこの右大臣（頼忠）今すこしなし上げて、わが代りの職をも譲らんと思したちて、ただ今の左大臣兼明の大臣と聞ゆるは、延喜の帝の御十六の宮におはします、それ御心地悩ましげなりと聞しめして、もとの親王になしたてまつらせたまひつ、さて左大臣には小野宮の頼忠の大臣をなしたてまつりたまひつ。右大臣には雅信の大納言なりたまひぬ。

（巻第二「花山たづぬる中納言」(1)九五頁）

兼明は、天禄二年（九七一）に左大臣に昇っていた。関白藤原兼通は、余命を覚悟し、実弟兼家を牽制するため、兼明をはずし、腹心の藤原頼忠を左大臣に据えたという。政争に巻き込まれたのである。[20] 激烈な悲憤慷慨を「兎裘賦」（『本朝文粋』）につづっている。

昭平も余波に飲まれたと思われる。皇籍復帰前の、二十四歳で右兵衛督という官職は、兼明と比べても遜色ない。兼明が右近権中将（従四位下）に昇ったのは二十六歳であった。臣籍にあれば、藤原氏に対抗し、左大臣兼明を補佐する立場にあったろう。兼明同様、忿懣やる方ない人事であった。世をはかなみ、永観二年（九八四）、三十一歳で出家している。[21] 長和二年（一〇一四）薨去。出家後二十年存命したことになる。臨終出

家とはいえない。

紫式部は、常陸太守の動向に無関心ではなかったと思われる。母方祖父藤原為信が、寛和二年（九八六）まで常陸介を務め、翌永延元年（九八七）正月十日に出家している（『小右記』正月十三日条）[22]。昭平が太守のとき、介を務めていた可能性がある。紫式部の家系には、ほかにも、常陸介や大掾に任命された者が多い[23]。式部は、昭平の悲運を凝視していたであろう。

末摘花の、常陸の宮の晩年の姫君という設定は、父宮の臣籍降下、皇籍復帰という紆余曲折を想定したとき、ありえるものとして首肯されるのである。

ただし、直接的な准拠やモデルと考えるには、三つの瑕疵がある。ひとつは、昭平が出家していること。物語の常陸の宮に、出家の感触はない。ふたつめは、昭平が寛弘年間（一〇〇四～一三）に生存していること。物語成立時に「故宮」ではなかった。三つめは、「匂兵部卿」巻に別の「常陸の宮」が登場していること。物語における最後の常陸の宮ではなかった。

にもかかわらず、参照事項として捨てがたいのは、昭平を想起し、重ねることによって、物語の享受が豊かになるからである。『栄花物語』が伝える事績には、そういう効果がうかがえる。昭平には、藤原高光女との間に、姫宮がいたのである。ただし、相当な美姫だった。正暦五年（九九四）の記事である。

かくて粟田殿（道兼）の北の方の親しき御有様にや、村上の先帝の九の宮（昭平）、入道して石蔵にぞおはします、また兵部卿宮と聞えさする、御同じはらからに三の宮と聞えさせし、それも入道して同じ所におはします。（中略）九の宮は、九条殿の御子入道の少将（高光）多武峯の君と聞えし、童名はまちをさと聞えしが御女に住みたまへりける、いとうつくしき姫宮出でおはしましたりけるを、いと見捨てがたう思しけれど、世の中はかなかりければ、思し捨ててけるなりけり。この姫君（昭平親王女）、いみじううつくしうおはするを、粟田殿、聞しめして、この宮を迎へたてまつりて、子にしたてまつりてかしづきこえたまふほどに、さるべき人々おとづれきこえたまふ人多かりけれど、聞き入れたまはぬほどに、故三条の大殿（頼忠廉義公）の権中将（公任）せちに聞えたまふ。はかなき御文がきも人よりはをかしう思されければ、思したちて取りたてまつりたまふ。二条殿の東の対をいみじうしつらひて、恥なきほどの女房十人、童女二人、下仕二人して、あるべきほどにめやすくしたてておはしそめさせたまふ。姫君の御有様いみじううつくしければ、いとかひありて思ひきこ

えたまへり。さてしばしありきたまひて、なほかかる有様つつましとて、四条宮の西の対をいみじうしつらひて、迎へきこえたまひつ。宮（遵子）も女御殿（諟子）も、いとうれしき御仲らひに思して、御対面などあり。いとあらまほしきさまなれば、粟田殿いと思すさまに聞え交したまふ。

（巻第四「みはてぬゆめ」(1)二〇五～六頁）

姫君は、繰り返し「いとうつくし」「いみじううつくし」と称讃される。末摘花とは対照的である。昭平は、見捨てがたく思いながら、世をはかなみ、出家した（波線部）。彼の厭世は、物語の常陸の宮や禅師の君の失意に重なる。

姫君の美質が、運命を切り拓く。藤原道兼が、評判を聞いて養女にした。道兼の北の方（遠量女）と姫君の母（高光女）が従姉妹だったのである。玉鬘物語を思わせる。上流貴族の耳目を集め、多くの貴公子が求婚する。関白頼忠の男、藤原公任が、切実さと手紙の卓越を認められ、婿に迎えられる。正暦元年（九九〇）十二月のことであった（『小右記』十二月二十五日条）。姫君は人柄もよく、公任の姉妹の遵子（皇太后）や諟子（花山帝女御）とも良好な関係を築く。公任といえば、三船の才で有名だが、四納言に数えられる能吏でもあった。理想的な婚姻だったのである。

差異が重要である。大輔命婦が光源氏に、「故常陸の親王の末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ、心細くて残りゐたる」と語り始めたとき、当時の読者は、昭平の姫君を想起し、評判の美姫を思い描いたのではないか。近似する境遇の姫君はいない。醜貌露見の衝撃は増幅される。そのうえで、人物設定の差異に気づく。驚愕したであろう。該当する日本語が見当たらない。「ミスディレクション」の仕組みである。故常陸の宮の姫君という設定が、劇的展開の伏線として方法化されていたのである。物語の高度な達成であった。

五、光君の二条院と末摘花の常陸の宮邸

同一の設定が、「蓬生」巻では、女主人公の窮境を表現する。昭平に近い運命が常陸の宮一族を襲い、父宮は失意のうちに亡くなり、兄は出家した。その悲劇は、「桐壺」巻以前に想定される、桐壺更衣一族の悲運[24]に重なる。

常陸の宮邸の描写が注目される。姫君は、光源氏の再訪を信じ、父の遺訓を守って暮らしている。女房や下人は、漸次去って行く。命綱の侍従まで離脱し、困窮を極める。

（末摘花は）はかなきことにてもとぶらひきこゆる人はな

き御身なり。ただ御兄弟の禅師の君ばかりぞ、（中略）しげき①草蓬をだにかき払はむものとも思ひよりたまはず。

かかるままに、①浅茅は庭の面も見えず、しげき②蓬は軒をあらそひて生ひのぼる。①葎は西東の御門を閉ぢ籠めたるぞ頼もしけれど、崩れがちなるめぐりの垣を馬、牛などの踏みならしたる道にて、春夏になれば、放ち飼ふ総角の心さへぞめざましき。（蓬生(2)三二九頁）

「葎」「蓬」「浅茅」の繁茂が邸宅の荒廃を表している。葎は蔓状で、蓬は背が高く、浅茅は低い雑草である。光源氏の家来が刈り払うまで、繰り返し表現される。「浅茅」二例、「蓬」八例、「葎」二例。他巻に比べ、突出して多い。荒廃の極限である。「末摘花」巻でさえ、「浅茅」と「葎」が各一例である。

二番めに多いのが、「桐壺」巻なのである。「八重葎」「蓬生」各一例、「浅茅生」二例。それぞれ「葎」「蓬」「浅茅」に対し、繁茂や群生を示す歌語である。三種の雑草が揃って表現される巻は、ほかにない。[25] すべて巻の中盤、桐壺帝が靫負命婦を派遣した、更衣の里邸、二条院に繁茂する例である。「蓬生」巻の常陸の宮邸の描写は、「桐壺」巻を引いているのではないか。

当該本文を検討しよう。桐壺更衣の死後、三歳の光君は二条院に里下がりし、更衣の母君（故大納言の北の方）と喪に服している。帝は、野分を機に、勅使として靫負命婦を遣わす。

A　命婦、かしこにまで着きて、門引き入るるよりけはひあはれなり。やもめ住みなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくろひ立てて、めやすきほどにて過ぐしたまひつる、闇にくれて臥ししづみたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、①八重葎にもさはらずさし入りたる。

南面におろして、母君もとみにえものたまはず。（母君）「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の①蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなん」とて、げにえたふまじく泣いたまふ。（桐壺(1)一七頁）

B（命婦）鈴虫の声のかぎりを尽くしても長き夜あかずふる涙かな

（母君）いとどしく虫の音しげき①浅茅生に露おきそふる雲の上人（同三二頁）

C（帝）雲のうへも涙にくるる秋の月いかですむらん②浅茅生の宿

思しめしやりつつ、灯火を挑げ尽くして起きおはします。（同三六頁）

到着のくだりがAである。草は高く繁茂し、葎（①）は訪問者を妨げるように蔓延している。雑草の描写は、後見役不在の反映である。父帝は、頼る対象ではない。祖母（更衣の母君）が亡くなれば、生き残るすべもなくなる。主人公は、生涯最大の窮地にあった。高貴な人物、保護者の死、荒廃した邸宅、生存の危機、それは「蓬生」巻の末摘花と同様の境遇であった。命婦は、寝殿の南面に牛車をつける。更衣の母君は、荒廃に恐縮する。勅使の目的は、若宮参内の勧奨であった（同二八頁）。このことが、のちの参内（同三七頁）につながる。想定外の救いの手が伸ばされたのである。

Bは命婦と母君の贈答である。Cは、報告を受けた帝の歌である。「浅茅生」（①・②）の共有によって、Bの贈答に遅れて唱和する趣が読み取れる。「浅茅生」は二条院を指すが、『長恨歌』理解から、楊貴妃の死や玄宗の憂愁に結びつき、桐壺更衣終焉の地が印象づけられるという指摘がある。[26]とすれば、「蓬生」巻の「浅茅」には、常陸の宮終焉の地という印象を看取できよう。常陸の宮の姫君に、「桐壺」巻の光君が重なる。「蓬生」巻でも、「野分」が荒廃に輪をかけている。

八月、野分荒かりし年、廊どもも倒れ伏し、下の屋どものはかなき板葺なりしなどは骨のみわづかに残りて、立ちとまる下衆だになし。煙絶えて、あはれにいみじきこと多かり。（蓬生(2)三一九～三三〇頁）

巻名の「蓬生」も、本文中の用例は「桐壺」巻に遡る。物語内引用の徴証が、いくつも認められるのである。

しかし、両者にとって、より重要な共通項は、出家した兄弟の存在である。桐壺更衣にも、出家した兄弟がいた。「賢木」巻の、光源氏の雲林院参詣に登場する「律師」である。

大将の君は、（中略）秋の野も見たまひがてら、雲林院に詣でたまへり。故母御息所の御兄弟の律師の籠りたまへる坊にて、法文など読み、行ひせむと思して、二三日おはするに、あはれなること多かり。（賢木(2)一一六頁）

雲林院の僧坊に籠もっている。故大納言家唯一の男子である。律師は、僧正、僧都に次ぐ僧官。この人物は、ここだけに登場する。

故大納言は、繰り返し「この人（桐壺更衣）の宮仕の本意、かならず遂げさせたてまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな」と遺言していた（桐壺(1)三〇頁）。北の方は遵守したが、更衣に「とりたててはかばかしき後見」はなかった（同一八頁）。律師は、更衣の後見も、一族の再興も顧みずに出家していたのである。禅師の君同様、一族の悲運が想定

される。[27] 三歳の光君は、一族の瓦解も含めて、「蓬生」巻の末摘花と共通する境遇にあったのである。

「蓬生」巻は、読者に、「桐壺」巻を想起するように表現され、展開している。とすれば、焦点は、救い主であろう。「桐壺」巻で、靫負命婦は、父帝が若宮参内を勧奨する口上と手紙を携えていた。三歳の若宮にとって、救いの手であった。やがて召還に応じ、内裏で生活することになる。

末摘花のばあいはどうか。

母方の叔母が訪問する。叔母には、亡姉に対する逆恨みがあって、末摘花を娘の召使いにしようと企むが、末摘花は拒絶する。夫が大宰大弐に決まると同行に誘うが、やはり断る。腹心の侍従まで取り込まれる。冬になって、叔母は最後通告にやって来る。

わづかに南面の格子上げたる間に寄せたれば、いとどはしたなしと思したれど、あさましう煤けたる几帳さし出でて、侍従出で来たり。（蓬生(2)三三八頁）

叔母は、寝殿の南面に牛車を寄せる。靫負命婦（前掲A）を想起させるが、勅使ではない。僭越な振る舞いである。南面からの訪問者が、「蓬生」巻では、招かざる客であった。引用関係に気づいていた読者は、この差異化に落胆することになる。姫君は拒絶し、侍従は去り、孤立は深まる。雪は蓬葎の蔭に積もり、下人の出入りも途絶える（同三四三頁）。

姫君の困窮が極限に達した四月、雨上がりの夕暮れ、遂に光源氏が立ち寄る。引用関係を認める読者に注目されるのは、惟光が光源氏を邸内に案内することばである。

（惟光は）御さきの露を馬の鞭して払ひつつ入れたてまつる。雨そそきも、なほ秋の時雨めきてうちそそけば、「御かささぶらふ。げに木の下露は、雨にまさりて」と聞こゆ。御指貫の裾はいたうそぼちぬめり。（同三四八～九頁）

露を払いながら「お傘がございます。まったく木の下露は雨以上でして」という。そのままで意味は通じるが、『源氏釈』以来、引歌が指摘されている。[28]

みさぶらひ御傘と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり（『古今和歌集』巻二十、東歌、一〇九一）

貴人の供人に「みさぶらひ」と呼びかけ、露への注意を促す東歌である。それを供人の惟光が引く点で、気がきいている。重複（傍線部）が多いにもかかわらず、差異を生み出している。地名「宮城野」を隠している点も洒脱である。「宮城野」は、仙台の東の歌枕。『古今和歌集』では六九四番歌にも登場し、萩と露の名所である。ここでは、荒廃した常陸の宮邸を喩えて

いる。惟光の意図は、「これではまるで宮城野ですね」という諧謔にあろう。それは、「みさぶらひ」歌を思い出せなければ理解できない。

しかし、「桐壺」巻を踏まえる読者にとっては、それだけではない。父帝が靫負命婦に託した手紙の歌を想起することになる。[29]

宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

（桐壺(1)二九頁）

『源氏物語』に「宮城野」の語は二例。もう一例は「東屋」巻である。ここでは、無視してよい。さて、右の「宮城野」は、宮中の暗喩であった。内裏を渡る風にも、「小萩がもと」光君を思いやるという。宮中と常陸の宮邸。ふたつの「宮城野」に語義的な連絡はない。が、添えられた手紙は、光君の現状を憂慮し、「今は、なほ、昔の形見になずらへてものしたまへ」と参内を促す、救いの手であった。

惟光の関知するところではないが、読者は、「みさぶらひ」歌を経由して、桐壺帝の歌を想起することになろう。惟光の引歌によって、救い主としての、桐壺帝と光源氏が重なる。末摘花にとって光源氏は、三歳の光君にとっての桐壺帝であった。光源氏にとって、末摘花の救出は、かつての自分を救出することでもあった。

六、むすび

常陸の宮の晩年に生まれた姫君という設定の背景を掘り下げ、表現との連環を探ってきた。稀有な設定が、末摘花物語の展開に昭平親王の事蹟を想起させ、「末摘花」巻では劇的展開を増幅させ、「蓬生」巻では一族の悲劇的背景を暗示したのであった。

長編物語の生成においては、後者が重要である。桐壺更衣一族の悲運と重なる。常陸の宮邸の描写に更衣の里邸の荒廃が反映し、「蓬生」巻は、靫負命婦訪問を下敷きに展開する。末摘花は、三歳の光源氏にあたる。両者には、多くの共通点があった。皇族出身、一族の不運、故人の無念、後見の不在、後見候補の出家、邸宅の荒廃、困窮。

光源氏は、父帝によって救われ、「蓬生」巻では末摘花を救う側にまわる。主人公は、かつての自分を救い出したことになる。

光源氏にとって、母の死後に直面した危機は、幼かったにせよ、原体験として人生に投影するものであった。ここでは、引

用論的関係から末摘花物語を考察対象にしたが、目を凝らせば、私たちはたびたび、主人公が零落した女君、沈淪しかねない女君を救う物語に出会うことになる。北山で若紫をかいま見たとき、祖母尼君の呟きから、少女の境遇を知って「すずろに悲し」（若紫(1)二〇八頁）と思う。「すずろ」とはあるが、自分の境遇との類似に気づいた結果であろう。主人公が幼少期に陥った窮境は、物語の長編的展開にとって、かけがえのない起点になったと思われる。

注

（1）高崎正秀「源氏物語の成立――末摘花伝承を中心に――」（著作集第六巻『源氏物語論』桜楓社、一九七一）、林田孝和「末摘花物語の「笑い」の形成」（『源氏物語の発想』桜楓社、一九八〇）など。

（2）三角洋一「蓬生巻の短編的手法㈠・㈡」（『源氏物語と天台浄土教』若草書房、一九九六）、岩原真代「末摘花と常陸宮邸の住環境――宮家社会における格差意識から――」（『源氏物語の住環境』おうふう、二〇〇八）など。

（3）針本正行「「蓬生」巻の末摘花」（『平安女流文学の表現』おうふう、二〇〇一）、田中隆昭「滑稽譚から賢女伝へ――末摘花の物語――」（『交流する平安朝文学』勉誠出版、二〇〇四）、原岡文子「末摘花考――霊性・呪性をめぐって――」（『日本文学』二〇〇五・5）、津島昭宏「をこ者の「心」と光源氏――末摘花を中心にして――」（『源氏物語における周縁的世界の研究――光源氏と周辺人物の交渉――』國學院大學大学院、二〇〇六）、吉田幹生「蓬生巻の末摘花」（『日本古代恋愛文学史』笠間書院、二〇一五）など。

（4）高橋和夫「親王と二世女王――故常陸宮と末摘花――」（源氏物語の鑑賞と基礎知識⑬『末摘花』至文堂、二〇〇〇）、吉海直人「末摘花物語の構造」（『源氏物語の新考察――人物と表現の虚実――』おうふう、二〇〇三）。

（5）『古今和歌集』『枕草子』『源氏物語』『栄花物語』の本文・頁数は、「新編日本古典文学全集」（小学館）による。

（6）黒板伸夫「『源氏物語』と官位制度」（『平安王朝の宮廷社会』吉川弘文館、一九九五）一九〇頁。

（7）「戸令」（日本思想大系『律令』岩波書店、一九七六）二三三頁。

（8）「禅師の君」と呼ばれる人物は、もうひとり「手習」巻に登場する（三例）。横川僧都の弟子で、小野の妹尼の娘婿中将の弟である。

（9）三橋正「浄土信仰の系譜」（『平安時代の信仰と宗教儀礼』続群書類従完成会、二〇〇〇）参照。

（10）小原仁『文人貴族の系譜』吉川弘文館、一九八七）参照。

（11）新日本古典文学大系『源氏物語』第二巻（岩波書店、一九九四）一三五頁、注二二。『枕草子』には、「内供」（二九七頁）とある。

（12）この呼称から真言宗に属していたことがわかる。内供奉十禅師は円珍以降天台宗の僧侶に限られたとして、本文に疑問が指摘されている（「漢籍・史書・仏典引用一覧」今井源衛、新編日本古典文学全集『源氏物語』第三巻（小学館、一九九六）巻末付録、四八一頁）。しかし実情は、僧綱兼任を許されなかった内供奉十禅師が、円珍の少僧都補任以降、天台宗に限って許されたのである。禅師の君が内供奉十禅師であったとしても、宗派上の問題はない。『平安時代史事典』（角川書店、一九九四）の「内供奉十禅師」項（小山田和夫）、本郷真紹「内

供奉十禅師の成立と天台宗」（「仏教史学研究」第二八巻第一号、一九八五）一三～七頁、佐伯有清『円珍』（人物叢書、吉川弘文館、一九九〇）四三頁など。『御堂関白記』では尋清と中玄が、『小右記』では延尋・覚縁・元真・朝源が、真言宗所属の内供奉十禅師として確認できる。

(13) 安田政彦「親王・内親王」（『王朝文学と官職・位階――平安文学と隣接諸学4――』竹林舎、二〇〇八）四一九頁。三国太守任官については、安田政彦「親王任国別の展開――太守補任をめぐって――」（『平安時代皇親の研究』吉川弘文館、一九九八）参照。

(14) 安田政彦氏注（13）の論文「親王・内親王」四一七～九頁。

(15) 岩原真代氏注（2）の論文、四六～七頁。

(16) 高橋和夫氏注（4）の論文、一八七頁。

(17) 「国司一覧」（『日本史総覧』Ⅱ（古代二・中世一、新人物往来社、一九八四）および『国司補任』第二～四（続群書類従完成会、一九八九、九〇）による。

(18) 『日本紀略』は、「新訂増補国史大系」（吉川弘文館）による。

(19) 『紫明抄』『河海抄』『花鳥余情』が、兼明親王の准拠を指摘している。浅尾広良「中務宮と明石物語――「松風」巻の表現構造――」（『源氏物語の准拠と系譜』翰林書房、二〇〇四）参照。

(20) 大曾根章介「兼明親王の生涯と文学」（『日本漢文学論集』第2巻、汲古書院、一九九八）二〇一頁。

(21) 高橋和夫氏注（4）の論文は、出家のため常陸太守を最終官位としなかったのであろう。

(22) 『小右記』『御堂関白記』は「大日本古記録」（岩波書店）による。

(23) 角田文衛「紫式部と常陸国」（『紫式部伝――その生涯と『源氏物語』――』法藏館、二〇〇七）参照。太守と介の交流を示す史料は見つからなかった。

(24) 吉海直人氏「桐壺帝即位前史」（『源氏物語の新考察――人物と表現の虚実――』）参照。

(25) 「浅茅」「蓬」「葎」「忍（草）」巻ごとの用例数

忍草	葎	蓬	浅茅		
0	(1)1	(1)1	(2)2	**桐壺**	
0	1	0	0	帚木	
1	0	0	0	夕顔	
0	0	(1)1	0	若紫	
0	1	0	1	末摘	
(1)1	0	0	0	葵	
0	0	0	(1)3	賢木	
(1)1	1	0	0	須磨	
1	2	8	2	**蓬生**	
0	1	1	0	松風	
0	0	1	0	朝顔	
0	0	1	0	柏木	
0	1	(1)1	0	横笛	
(1)1	0	0	0	橋姫	
0	1	0	1	椎本	
(1)1	0	0	0	総角	
1	0	0	0	宿木	
0	1	1	0	東屋	
0	1	0	0	浮舟	
0	1	0	0	手習	
(4)7	(1)12	(3)15	(3)9		

※カッコ数字は、それぞれ「浅茅生」「蓬生」「八重葎」「忍」の例。
※源氏物語大成と新日本古典文学大系『源氏物語索引』（岩波書店、一九九九）使用。

(26) 上野英二「平安朝における物語――長恨歌から源氏物語へ――」（『源氏物語序説』平凡社選書、一九九五）二八頁。

(27) 根本智治「光源氏の雲林院籠り」（「中古文学」第四十四号、一九九〇）二四頁。根本氏は、光源氏にとっての律師に、常康親王にとっての紀有常を看取している。源氏物語の鑑賞と基礎知識⑩『賢木』（至文堂、二〇〇〇）一二三頁「律師」項（縄野邦雄担当）。

(28) 『源氏物語大成』巻七（中央公論社、一九五六）三〇一頁。

(29) 國學院大學二〇一八年度日本文学演習Ⅰ（塚原担当）における植竹里菜氏の発表による。